

編集：山田浩司 & 美澄

Address: 2208 North Quantico Street, Arlington, VA, 22205, USA

Phone: 1-703-241-0621 E-Mail: mickeyy@pc4.so-net.ne.jp URL: <http://www.sanchai.net>

一瞬の悪夢、夫婦そろって前科者

ミニバン前輪大破



樹生のタッカホー小学校幼稚部入学を前日に控えた9月2日（勤労感謝デー）の夕方、通信講座の勉強のために自宅に残っていた私のところに、千智の靴を買いに出かけていた美澄から電話が入った。

「ゴメン、事故しちゃった。タイヤが外れて動けないの。警察呼んだ方がいいかな。」そう聞かれた私は、事故の時の対処方法を調べてまた電話すると言っていったん電話を切った。切った後でふと気付いた。美澄も千智も大丈夫だったのだろうか。すぐに美澄から再度電話が入り、警察が既に到着して検分を始めたことを知らされた。私は、隣りで遊んでいた樹生をトム&ニーナ夫妻に預け、車両登録証と車両保険証券を持ち、現場に急行した。

事故は我が家からほど近いリー・ハイウェイとシカモア通りの交差点のすぐそばで起きた。リー・ハイウェイの緩やかな下りを交差点に向かって走ってきた美澄は、そこであまりにも強い眠気に耐えられず、一瞬意識がとんでしまい、緩やかに左にカーブしている道路を真っ直ぐ下って路肩駐車している車に左後方から突っ込んだのだ。幸い制限速度よりもはるかにゆっくり走っていたので、乗っていた美澄にも千智にも怪我はなかった。相手の車も、走れないことはなかった。でもうちのミニバンは右前輪が完全に外れていた。

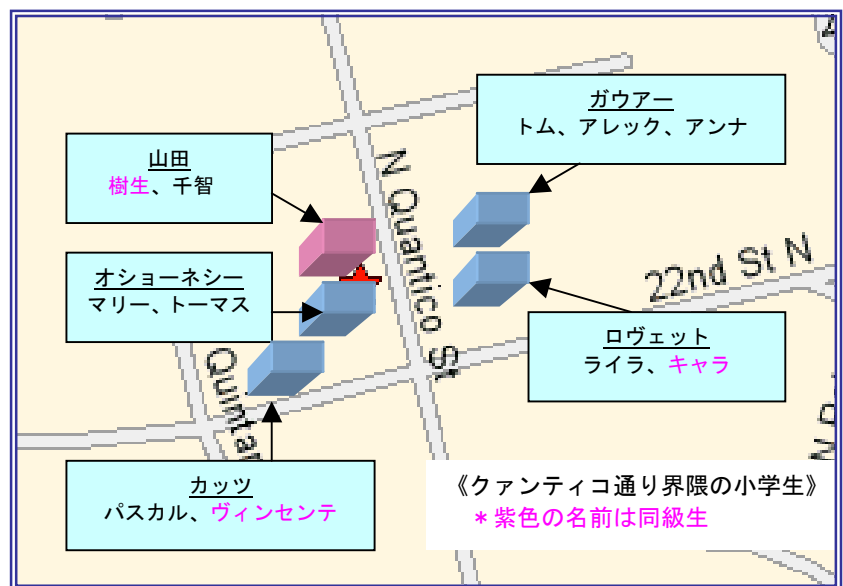
言い逃れができる状況ではなかったので、美澄は警察の調書に正直に居眠り運転と書いた。但し、表現の仕方にはかなり気を遣った。前回私がスピード違反+αで警察のお世話になった時と同様、居合わせた警官は裁判所出頭のアポをさっそく取ってくれた。また、近所のレッカー会社に連絡して、動けないミニバンの撤去を手配してくれた。さすが警察、手際が良い。

警察の検分が終わって帰宅した美澄は、ただちに保険会社に連絡しこの先の手続を確認した。保険会社では、美澄が被害者に直接連絡を取る必要はないと言ったが、この車のオーナーは意外と近所の住民だったので、後々不快になることがないように、美澄は電話で連絡を取ろうとした。留守電にメッセージを入れておいたが、返事が来たのはなんと1週間以上後で、しかも滞在先のハワイからの電話だった。結局、オーナーが事故現場から車を移動させるのにさらに1週間ぐらいかかった。

美澄の裁判は10月8日。次回「サンチャイ通信」では、久々の法廷レポートをお送りしたい。それにしても、美澄も千智も無事で良かった。

子供達の新学期

- **近所には子供がいっぱい**： 9月に入り、樹生は我が家の学区にある「タッカホー小学校」の幼稚部に入学した（こちらは公立の幼稚園は小学校と同じ建物の中にあるので、日本的に考えれば小学校入学と同じだ）。入学式を前々日に控えた週末、千智を外に連れ出した私は、家の前で次男のアレックを連れた向かいのダイアナと偶然会って立ち話を始めた。そこに隣りのニーナが子供達を連れて車で帰宅し、さらに斜向かいのサリーが犬のディーバの散歩のために長女のライラを伴って現れた。この4家族、ガウアー一家のトム（スワンソン中学校）、オシヨーネシー一家のトーマス（日本なら樹生と同学年だが、誕生日が10月より後なので未だ小学校に上がれず）、我が家の千智を除き、子供は全員タッカホーに通学する。立ち話をしている、今秋幼稚部に上がった樹生と、ロヴェット家のキャラがクラスメートだとわかった。さらに、樹生とクラスメートで、サッカークラブも同じヴィンセンテも、すぐ近所であることが最近わかった。さすがに、住所によって校区が決まっている公立小学校だ。これからは、遠くの日本人よりも近くのアメリカ人ともっと付き合わねばと痛感させられる。
- **憧れのバス通学**： 公立幼稚園に入学したことにより、樹生のバス通学が始まった。毎朝決まった時間に親が子供を送って行き、スクールバスに乗せるのである。新しい環境に適応できるかと心配したが全くの取り越し苦労で、樹生は入学の翌日から自分の体よりも大きいバックパックを背負って喜んでバス停に向かう。時に通勤途中のパパが、時に千智を車に乗せたママが、樹生をバス停まで連れて行く。バス通学で、樹生は公共の場でのルールを覚えている。道路の横断、運転手のおばさんへの挨拶、レディファースト等等。幼稚園まで送り届ける必要はなくなったが、こうして樹生が1人で動けるようになってくると、親としては少し寂しい気もする。バスに乗り込む樹生を眺めながら、子の成長を実感している今日この頃である。
- **昼寝が足りない**： 最近、パパが帰宅すると、ソファで寝ている樹生をよく見かける。ウェストゲート託児センターでは午後昼寝の時間があつたが、タッカホーでの樹生のクラスは、午後3時35分までみっちりスケジュールが詰まっている。元気に遊んでくると、本当に疲れるようで、晩御飯まで待てずに沈没して朝まで起きないパターンが結構多い。樹生と遊びたくて仕方がない隣りのトーマスはいつも悲しげだ。また、この秋こそは樹生に剣道をやらせようと密かに期待していたパパも、剣道の練習に出かける前に爆睡状態の樹生を起こすのは忍びなく、結局樹生の剣道再開はのびのびになっている。
- **サッカークラブ入会**： 「スポーツ何がやりたい？」樹生に尋ねたところ、答えは「サッカー」だった。サッカーならこの先この途上国に行っても通用する。ましてやここはアメリカ、いつぞやの「サンチャイ通信」でもご紹介したように、少年少女サッカーが非常に盛んな土地柄だ。タッカホー入学時の配布書類の中にサッカークラブ入会申込書があつたので、早速申し込んだ。所属チームは、タッカホーとノッティンガムという2つの小学校校区の子供が参加する「北西部アーリントン（NWA）ライオンズ」だ。パパは申込みのため、ノッティンガム



小学校に出かけたところ、申込み会場は大盛況で、こんなに希望者がいるのかと驚いた。練習も始まった。月・水曜日の夕方、近所のグラウンドで行なわれる。樹生の所属する U-6 (6 歳以下の男女) の部は、登録が 10 人程度だとか。こうして平日練習し、週末は試合だ。いよいよ我が家も当地のアメリカ人家庭と同様、子供のプレーに一喜一憂する、そんな週末が 11 月中旬まで続く。



- **PTA は寄付集め?** : 子供の通う学校を通じて、少しはコミュニティのことを知ろうかと思い、パパは PTA の集まりに出席してみた。体育館みたいな所で、父兄が沢山集まって話を聞くのかと思って気楽に行ったのだが、会場はなんと小学校の図書館の片隅のテーブルで、出席者は約 30 人くらい、うち 2/3 は PTA の役員か学校の先生という構成だった。こんな小さな集まりなのかと少々拍子抜けした。さらに驚いたのは、議題の半分くらいがファンド・レイジング (寄付金活動) に関するものだったことだ。「去年はいくら集まったから、今年も頑張りましょう」とか言われても、俺は税控除ないので元々インセンティブがない。また、アメリカには「マッチングファンド」という仕組みがあって、通販でいくら買い物をしたら、それと同額が通販に商品を挙げている企業の設立した財団からなんとか基金に寄付が行なわれる。これで包装紙やら本やらを沢山買わされるイベントが毎月のようにあるらしい。こうして集まった寄付金は、学校施設改善や特別教育プログラムの実施基金としてプールされる。親からすれば、子供の通う学校が自分の寄付で良くなるのだからそれは必死だ。寄付金の額で学校自体の評価が決まるのだ。それにしてもこの類の話が続くと本当に辟易する。(断っておくがこの類の寄付を私が全くやっていないわけではない。)
- **プリンセスはウェストゲートへ** : そして、めでたくオムツが取れた我が家のプリンセス千智は、樹生がこれまで通っていた「ウェストゲート託児センター」に晴れて入園した。初日こそマリさんのところよりも多くの子供と先生に囲まれ、ママに置き去りにされて大泣きしたプリンセスであったが、2 日目以降は普通に通うようになった。樹生と同様、子供達の先頭に立って、先生のすぐそばでお話を聞いているらしい。それでも環境が変わったことで毎日疲れるらしく、時々「マリさんのところに行きたい」と口にすると、朝は体がだるそうにしている。ただ、朝の寝起きの悪さは、夜の寝付きの悪さの裏返しでもある。プリンセスはウェストゲートできっちり昼寝をしてくるので、お兄ちゃんと違って夜も絶好調、親が起きているとプリンセスもいつまでも寝てくれない。プリンセスは自転車は不要とばかりに、週 1 回の幼稚園の「バイク・デー」にもお兄ちゃんのお下りの自転車を持って行かない。そうこうするうちに秋も深まり、「バイク・デー」も終了。プリンセスの粘り勝ちに終わってしまった。
- **パパ、ママ、樹生に英単語を教わる** : 子供の語彙吸収能力は本当に凄まじい。パパやママが今でもまともにできない英語の R や L、T の発音をしっかり覚えているし、時としてパパやママの知らない単語を樹生が口にすることがある。「ブリストア」が「水ぶくれ」という意味だなんて、私は全然知らなかったぞ。さらに、千智が時に口ずさむ意味不明の英語や、何度聴いてもわからないマリーの英語を、樹生が通訳してくれたこともあった。ひと夏を越して、樹生はさらに成長したと思う。ウェストゲートと違い、タッカホーでは周囲に日本人どころか外国人すら少ない。そんな中でも楽しく毎日学校に出かける樹生は本当にエライぞ!

「アメリカ南北戦争において南北両軍が多数の死者を出し、北軍が勝利した戦い。1860年秋に奴隷制廃止を訴える共和党のリンカーンが大統領に当選すると、これを不服とする南部7州が公然と合衆国から離反する意志を示し、南部連盟（アメリカ連邦）を結成。南部と北部が争った内戦＝南北戦争は、1861年に始まり、最初は南軍が優勢だったが、その後一進一退の消耗戦が続いた。一般には、このアンティータムの戦いを機に北軍が優勢に立った、といわれるが、それほど明確な勝者・敗者の差はなく、ただ集中砲火の悲惨さだけが目立った（実際、戦争はその後4年も続いた）。むしろ北軍の政治的勝利として、リンカーン支持がより強力になり、また英仏両国の南部連盟承認を思いとどまらせ、決定的な国家分断の危機を回避できた意義が大きい。」（エリック・ドウルシュミート著『ヒンジ・ファクター：幸運と愚行は歴史をどう変えたか』2001年、東京書籍より）

8月上旬にゲティスバーグを初めて訪れて以来、南北戦争にはまっている浩司パパである。

ゲティスバーグのおよそ1年前の1962年9月17日に起きた「アンティータムの戦い」は、我が家から車で1時間半ほどのメリーランド州シャープスバーグが舞台となった。この小さな村の東方から南のポトマック川に流れ込む小川が「アンティータム」と呼ばれ、この小川を挟んで南軍と北軍が対峙した。北軍87000人、南軍30000人が動員され、悲惨な競り合いが繰り返された挙句、それぞれ12000人、14000人の死者を出した。

今年、「アンティータムの戦い」から丁度140年目に当たる。メリーランド州ハイガーズタウンでは、アンティータム140周年を記念して、9月13日から15日にかけて、南北両軍の軍服をまとったボランティアを動員して戦闘シーンを再現するイベント「Reenactment（再演）」が開催された。実際は1日で終わった戦闘だったが、これを3日間に分け、戦闘の節目となった戦局を再現するのだ。私達が訪れた14日は、朝6時から「トウモロコシ畑（The Cornfield）」と呼ばれた戦闘が演じられ、午後4時からは「血塗られた道（Bloody Lane）」と呼ばれた戦闘が再演された。エキストラの多くは早朝のデモンストレーションの後、南軍北軍に分かれて双方のキャンプ地で昼寝をしていたが、その間も砲兵隊による砲弾射撃の実演や、騎馬隊による進攻デモが行なわれ、さらに会場には南北戦争ゆかりの展示テントやおみやげもの売り場もあって、さながら一大テーマパークの様相だった。（実際の古戦場とは違う場所がイベント会場であった。）



こういう所に来る人は、その道の「オタク」が多い。戦闘シーンの見物のために、わざわざ19世紀の服装に身を包んで、日傘を差してやって来た貴婦人もいれば、エキストラでもないのに南軍か北軍の軍服をまとい、銃剣を持って会場を歩き回っていたオジサンも大勢いた。午後4時から「血塗られた道」の戦闘をよい場所で見ると、12時くらいから会場入り口に並んでいる人もいれば、並ぶのは誰かに任せ、駐車場にキャプテンチェアを広げて読書にいそしむ人、車の中で昼寝している人もいっぱいいた。

日本の歴史オタクは、アメリカの「常識」を事前に勉強せず、ふらっと来てしまったことを後悔した。仕事が忙しかったので、アンティータムの戦闘に至るまでの両軍の動きや、アンティータムにおける両軍の陣形の推移、そして戦闘の結末とその歴史的意義といったことを、あまり予習していなかった。も

う少し綿密に下調べして来ていれば、戦闘シーンの観戦も、それなりに意味があったかもしれない。しかし、中途半端な時間に会場入りして、会場を歩き回るのに疲れてしまい、何が何だかわからないうちに、会場を後にしてしまった。子供達にこれからどこに行って何を見るのか、きちんと説明せずに車に乗せたので、会場に着いてすぐに「おうちに帰りたい」を連発されるはめになった。

来年7月はゲティスバーグ140周年だ。今度こそ事前に綿密な準備をして、家族みんなに満足してもらえる旅にしたいと思う。

アメリカで見る「ウルトラマン・ティガ」



三鷹の父のご厚意で、日本で放映中の「ウルトラマン・コスモス」をビデオに撮って送っていただいている。樹生のお楽しみの番組だが、樹生のウルトラマン・ブームは1999年の「ウルトラマン・ティガ」再放送で火が点き、今日に至っている。樹生のオモチャの中には、「ティガ」のミニチュア人形がいくつかある。

隣のトーマスは、我が家でウルトラマンのビデオを何本も見せられ、近所の「トイザラス」では手に入らない見慣れないウルトラマンのオモチャを手にして、すっかりウルトラマンのファンになった。日本語のビデオは意味はわからないけれど、邪悪な怪獣を倒す単純明快なストーリーは、アメリカの子供にも十分わかる。そんなトーマスが、8月頃から、「テレビで『ウルトラマン・ティガ』が始まるよ」と騒ぎ始め、私達も新聞のテレビ欄を注意して見るようにしていたが、9月の第2週の土曜日から、本当に「ティガ」が放映されるとの情報をその当日になって掴んだ。

日本の特撮モノでアメリカに輸入されてヒットしたものといえば、テレビ朝日系列で放映されてきた東映スーパー戦隊シリーズがある。「ゴウルフファイブ」「タイムレンジャー」「ガオレンジャー」等が、アメリカでは「パワーレンジャー」の名で放映され、アメリカの子供達のハートをつかんでいる。キャストは殆ど

アメリカ人に置き換えられ、戦隊の格闘シーンと巨大ロボットと怪獣の戦闘シーンだけが日本版からの流用である。日本では男性が演じていた隊員がアメリカ版では女性によって演じられていたりする。

だから、「ティガ」が放映されるとして、隊員全員が日本人だったGUTS/TPCをアメリカ版ではどのように描くのが興味があったのだが、実際に見ると、完全に日本版をそのまま放映していた感じだった。勿論、オープニングとエンディングの歌はアメリカ版では入らないし、BGMも日本版とはかなり違う。途中1回しかCMの入らない日本と違い、アメリカでは30分枠の間に数回CMタイムがある。それでも、登場人物が日本人ばかりの地球防衛軍をそのままアメリカで放映するのは画期的だと思った。

今週も隣のトーマスが遊びに来た。樹生との合言葉は、「僕、ウルトラマン・ティガ見たぞ！」だ。

パパの自己申告書(その2)

カザフスタン・ヌラ川水銀除去プロジェクト

世銀では、誰もが何らかの数字で評価される。「協調融資担当官」という肩書きの私は、世銀加盟の先進国からの信託基金をどれだけ受託するのに貢献したか、他の援助機関から世銀プロジェクトにどれだけ協調融資を引っ張り込んだかで評価される。対日本関係でいけば、信託基金の拠出元は財務省が殆どで、協調融資の相手として大きいのは国際協力銀行(JBIC)である。JBICの場合は、世銀と同じ銀

行だから非常に取り組みやすい。これが技術協力実施機関である国際協力事業団（JICA）との協調融資ともなると、どうやったらいいのか悩んでしまう。世銀の貸出プロジェクトの技術援助コンポーネントを JICA が担当するという話でもあればいいのだが、そのためには、途上国の現場レベルで、世銀職員と JICA 職員がかなり綿密な連携プレーを行なわないといけない。これが実際は非常に難しい。世銀本部から JICA 本部に働きかける案件形成もあり得る。でも、この場合の JICA のお決まりの逃げ口上は、「案件は現場で形成されるものだから（本部同士で話を進めても現場が Yes と言わなければできない）」である。では現場で JICA にアプローチしているケースは上手く行っているかというと、「本部に聞いてみないとなんとも言えない」との答えが返ってくる。JICA の場合は、意志決定がどこで行なわれているのか非常にわかりにくい。この 2 年間、JICA と世銀の個別案件レベルの連携は意外と進んでいない。

ところが、最近になってこれは上手く行くかもと期待できそうな案件が、ワシントンの世銀本部レベルで持ち上がっている。世銀が準備中のカザフスタン・ヌラ川の水銀除去プロジェクトの技術援助コンポーネント（外国人コンサルタントを雇って政策助言や技術指導を受けるもの）に、JICA の専門家派遣事業を通じて環境省国立水俣病総合研究センターの研究員を派遣するのだ。つまり、この専門家派遣経費の部分が JICA 負担となり、世銀の貸出（相手国側の事業予算として使用される）と協調融資の形になるのだ。9 月末に世銀のタスクマネージャー（TM）が日本に出張し、東京で JICA、外務省、環境省、水俣で水俣病総合研究センターに直接協力要請を行なっている。

この話に私がどう絡んだかというと、

- ① 水銀除去事業の実現可能性を評価できる日本の専門家として、水俣の研究員が最も優れていることを TM に売り込んだ。
- ② 私自身が、水俣の研究員を JICA 専門家としてバングラデシュに派遣したことがあるので、JICA のプログラムを通じてカザフスタンにも派遣することができると TM に売り込んだ。
- ③ JICA の技術協力事業は相手国からの要請に基いて実施されることを TM に説明し、カザフスタン政府が日本政府に提出する専門家派遣の要請書を、日本側受付期限の 8 月末に間に合わせた。
- ④ その上で、日本の関係者（JICA アジア第二部長、世銀東京事務所、水俣病総合研究センターの先生）に連絡を取り、TM に代わって日本出張のお膳立てを行なった。

今回の話が上手く行きそうなのは、TM が水俣の経験と研究実績、ノウハウを非常に高く評価してくれていたということと、私の JICA 時代に同種の技術協力プロジェクトに携わった経験があり、水俣の先生との面識があったことが非常に大きかったと思う。私は水俣の先生に専門家としてバングラデシュに行ってもらうために自ら水俣まで打合せに行ったので土地勘もあり、かつ水俣病に関する書籍も読んでいてそれなりに知識もあった。ついでに言うと、世銀職員のお決まりのパターンで 8 月 9 月と休暇で殆どワシントンにいなかった TM に代わって、日程に関して世銀東京事務所と調整を行なったのは私だ。TM に全て任せていたら、日本出張すら実現していたかどうかわからない。

JICA と世銀が四つに組んだ本格的な個別連携案件になるかもしれないこの話、なんとか日本側も真剣に取り上げてもらいたいと期待している。さすれば自分の評価にも繋がるので楽しみだ。

編集後記

- 「アンティータム」という歴史ネタを取り上げたついでに、今年の NHK 大河ドラマ「利家とまつ」についてひとこと。「利家とまつ」は TV ジャパンで毎週見っていますが、昨年「北条時宗」以上におかしいと思うことが幾つかあります。「時宗」の時みたいない史実ネタはそれほど多くありませんが、史実への言及を端折って視聴者のご想像にお任せしますというケースがあまりにも多い。秀吉が光秀を討った山崎の合戦は口伝でしか語られなかったし、秀吉と家康が戦った（筈の）小牧長久手の合戦も、戦闘シーンを全く見せずに停戦に持ち込まれました。結果として、さっきまで大坂にいた利家が

次のシーンで金沢に帰還していたり、冬の立山を越えて駿府の家康に秀吉と戦わせようと説得に出向いた佐々成政が、次のシーンで富山城に戻っていたり、あまりの距離感のなさに「あれ？」と思わされることが多くなってきました。この調子で行くと、これから描かれるであろう朝鮮出兵も、どの程度取り上げられるのかわかりません。「利家とまつ」の脚本家は、1996年の大河ドラマ「秀吉」と同じ人ですが、あの時も朝鮮出兵はまともに描かれていなかったのを思い出します。また同じ脚本家なのに、今回は秀吉の弟の羽柴秀長を登場させず、秀吉側近を浅野長政と石田三成で済ませています。もっとひどいのは女性の描き方です。乱世の世にまつが小丸山城（石川県七尾）と越前府中と近江長浜と京都の間を頻繁に往来し、少し前にも岐阜と清洲と荒子を幾度となく往来していましたが、この頃の女性がこんなに自由に行ったり来たりしていたとはとても思えません。そうした移動のシーンを完全に端折っているのが、登場人物が皆ワープでもしているような錯覚に陥ります。次に、戦闘シーンの少なさ。野外ロケをやるほど予算がないのか、合戦シーンを端折って口伝や回想シーンで済ませたり、主要人物が接近戦を仕掛けているシーンを近場から撮影していかにも戦っていますと見せたりして、戦国時代のわりには乱世の世が実感として伝わって来ない、変なドラマになっています。こちらでは土曜日に昔の大河ドラマ「武田信玄」の再放送を見ることができそうですが、「信玄」と比べると、「利家とまつ」は悲しいくらいに戦国の緊迫感、戦国武将の躍動感といったものが感じられません。（浩司）

- 18歳で免許を取ってからはや16年、ついに事故を起こしてしまいました。その日は新学年が始まる前日で、千智の靴がないことに気が付いて午後買い物に出かけた帰り道のことでした。ショッピングセンターを後にした私は、眠気を抑えながら運転していました。しかし後もう少しという所で一瞬ですが眠気に負けてしまいました。「ドン」という衝撃で気がついたら、路肩に駐車されていた車にぶついていたのです。慌ててバックしようと思ったのですが、何故かバックできません。車の外に出ても原因がわからず困っていると、通りがかりのドライバーに「タイヤが外れているから動かさないよ」と言われ初めてバックできない原因がわかりました。慌てて助手席側に回ってみると、確かに右前輪が外れているではないですか。取り合えず浩司さんに電話して（携帯を持っていて良かった）、事故を起こしたことを伝え、暫くしたら警察が来てくれました。さっき声をかけてくれたおじさんが警察にも連絡してくれたのです。その後のことは浩司さんの記事に書いてある通りです。9月2日に事故を起こしてから車が手元に戻って来たのは10月2日で、1ヶ月かかりました。費用も\$7,495.91かかり（相手の修理費は除く）保険に入っていなければ大変なことになっていました。お陰で11月更新の車両保険料は値上がりしましたが、誰も怪我をせず車の被害だけで終わったのは不幸中の幸いだと思っています。（美澄）
- NWA ライオンズの一員としてサッカーリーグ戦に参加するようになった樹生君、訳もわからず4人対4人の試合に駆り出されています。ルールもわからず統制が全く取れていない我がライオンズは、相手チームに翻弄されまくり、連敗街道まっしぐら！そんな中で新たな発見は、樹生君は負けることが相当悔しいらしいということでした。相手にゴールを決められる度に悔し涙を浮かべ、「もう嫌だ！」を連発。なだめずかしてゲームに復帰させるのに苦労させられます（その間、味方チームは3人でプレーしており、新たなピンチを迎えているのです）。U-6のライオンズは、ボールそっちのけで途中からピッチ外でままたごを始めてしまうチームメイトがいたりもします。連敗なんて何のその。楽しくやりましょう。でも、樹生の負けず嫌いなところは、なんとか伸ばしてやりたいと思うのでした。負けるのが悔しかったら、裏庭でパパと練習しようよ、樹生君。（浩司）
- 9月3日の樹生のタッカホー小学校初登校の日、学校に行ってみると殆どの生徒の親が来ていて、学校の前で写真をとったり、ビデオをまわしたりと忙しそうでした。入学式はないけれど、小学校入学は子供の成長にとって大きなものなのですね。私は実感が湧いてなくてカメラを持って行かなかったのですが、持って行けばよかったと後悔しています。でも日本の入学式の方が重みがあって好きですけど…。お陰様で樹生も大きくなりました。（美澄）